

県研究主題

一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案1

提案者 村山 則子（湘南三浦地区）

＜研究主題＞ **個別の教育的ニーズに応じた指導の実践** — **ことばの指導を中心にして** —

1 提案内容

集団や場に関する不安や恐怖心が強くてパニックをおこす児童が、健康に育ち、将来、社会の中で生きていくことができるように、入学からおよそ3年間をスパンにした長期目標をたて、ことばの指導をスモールステップで実践してきた。

(1) 実態把握と目標設定

① 実態把握

保護者や幼稚園からの聞き取りを行い入学当初の本児の行動観察を行った。

＊偏食がある。慣れない場所や食器では食べられない。

＊パニックになると行動は激しくなる。＊予定変更や予想との違いに混乱が生じる。等

② 長期目標

○「できる課題」「わかる課題」を提供することで落ち着いて学習に臨めるようにする。

○ことば（コミュニケーションツール）を獲得する。

○校内で落ち着いて過ごせる場所を増やす。 ○給食を食べられるようになる。

(2) 取り組み

① 1年生での目標と取り組み

【弁別力をつける。物には名前がある。物の名前がわかる。教室以外の場所に入れる。】

ア 「おなじ」に気づく《マッチング》のステップ

実物同士 → 写真カードと実物 → 写真カードのものを部屋で探す

わからなかったときは教師が手を添えて声で「おなじ」と言いながら示す。

正解のときは、笑顔・拍手・いい子いい子のリアクションを与える。

イ 「弁別力」を付ける《マッチング》

マッチングできるものを増やすために、本児が好きな海のものから始めて、身の回りのものを絵カードに採用する。答えがちがう時には、教師はカードを受け取らないようにする。

ウ 体育館に入れるようにするためにステップ

担任とクラスの子2人と入る→体育館までの距離を縮める→一緒に入る人数を徐々に増やす→整列が崩れた時に入る→朝会の初めから入る→学年の列に並ぶ

② 2・3年生での目標と取り組み

【絵を見て名前を言う。単語を読む。自分の名前を答える。体育館で児童列に並ぶ。】

ア 「これはなんだ？」の問いに答える

オウム返しする前に指導者が「○○」と答えを言うようにする。

イ 単語を増やす《マッチング》のステップ

絵を見て単語カードを取る→音と単語カード→耳で聞いた音で単語カードを取る

→単語カードを読む（野菜・くだもの・乗り物・からだ など）

ウ 「名前は？」に答える エ 「見せて」のことばをつかう

③ 4年生の目標と取り組み

【ものの名前を増やす。動作語がわかる。二語文がわかる。誤用法を訂正する。】

ア 二語文を聞いてイラストカードを選ぶ。 イ 「見せて」のことばを使う。

(3) 実践のまとめ

- ・取り組みを通して、ことばには意味や思いをこめることができることを理解したり、文中からキーワード（知っていることば）を聞き取ったりすることができた。
- ・自発語は、「いや」「いいこ」「かして」「そと（行きたい）」「ほん（読んでいい?）」などの要求を伝えることばが多い。

2 協議内容

- ・マッチングやスモールステップの取り組みが参考になった。緻密な指導が成果を上げている。偏食に対する取り組みは、家庭との連携も大切である。交流級で他の友だちと一緒に食べると苦手な食べ物が食べられるようになることもある。
- ・体育館に入ることが苦手な児童のための様々な取り組みについて、参加者たちから情報交換がなされた。いやな思いをさせないことが大切である。
- ・ことば以外のコミュニケーション手段（身ぶりやカード利用等）にも取り組めたらいいのではないか。ベースとなるのは、コミュニケーションしようとする力を付けること。それには、かかわりの中で楽しめることを教材化することが大切である。
- ・これから身につけさせたいコミュニケーション力は、一般の人に伝わることばを使うことである。例えば、子どもに代わって指導者が「ごめんなさい」と言うなど、状況に応じたことば遣いの手本を示すことで、きちんとことばを入れていきたい。
- ・絵カードを効果的に使うには6枚が限度ではないか。また、絵カードに文字を入れるときは、視線の動きを考慮して絵の上の文字を入れるとよい。また、文章は絵カードを使って表現することができる。「わたし」「トイレ」「歩く」の3枚の絵カードを並べることで「わたしはトイレに行きたい」というメッセージになる。

3 まとめ

- ・たいへんていねいな取り組みで、保護者が指導者に全幅の信頼を寄せていることもわかった。就学指導の経験からわかることは、多くの保護者は葛藤しているということだ。保護者は、学校に「安心・安全・安定」を望んでいる。それに加えて「できるようになってほしい」「わかることをふやしたい」という学力定着への願いも強い。学力をつけるために大切なことは、プログラム学習の基本である「できることから始める」ことである。「ほめる」ことは、指導者とのかかわりの中で強化され、「じぶんはいい子なのだ」という自尊感情を育てることになる。保護者にとっても「うちの子はすごい」「いい子だ」と思えることは、気持ちの安定をもたらすし、指導者との信頼関係がさらに強まる。その信頼関係があつてこそ学力定着が促進される。
- ・社会性を育てるには、生活の中で見つけた課題をもとに、教科をこえた学習として生活単元学習のなかで展開したい。また、通常級の友だちとのふれあいは、交流の価値であり、社会性を育てることにつながる。

＜研究主題＞

児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導内容、指導方法、指導体制、評価の工夫・改善
～自分の思いや考えを伝える力の育成をめざして～

1 提案内容

近年、在籍児童数の増加により、さまざまな発達段階に応じた学習内容の精選、それぞれに適した指導法や教材の研究が求められるようになってきている。そこで、今回は、本学級で取り組んでいる対人関係やコミュニケーションの力の向上を目指した指導に関して、特に個別の対応が必要な児童2人を例にして紹介した。

(1) スケジュールの管理と場の設定

毎朝、児童は自分の「スケジュールボード」で一日の時間割をチェックする。将来の自立に向けて、自分でスケジュールの管理ができるように支援している。また、毎時間「学習手順カード」で学習の流れを確認している。交流級の担任と連携を取り合い、指導に当たっている。

(2) 単元づくりの実際 単元名「お話しよう」 国語（5時間）

① 単元設定の理由

在籍する児童は、他者意識が薄く、相手の話を聞いていなかったり「共感」を示すあいづちがうてなかったりする。そこで、今回は、社会性に関する指導の中の、対人関係、コミュニケーションに関わる内容を取り上げた。児童の発達段階、特性に応じて言語活動を中心とした4つの単元を設定した。本単元はそのうちの一つである。

② 指導計画

- 1・2時 ○お口のたいそうをしよう ○文で、話そう 絵カードを見て
- 3～5時 ○お口のたいそうをしよう ○文で、話そう
○「したこと」を話そう きのうのことを話す
○「したこと」をみんなの前で話そう 5人くらいのグループで

③ 目標と評価

	個人の目標（抜粋）	評価
A	・相手のほうを見て、伝わるように話すことができる。	「～です。」「～するの？」など、文の形で話すことが少しずつ見られるようになった。
B	・自分の経験したことを、相手にわかるように話すことができる。	担任の助言があれば、意識してはっきり話そうとすることができるようになってきた。

(3) 単元づくりのポイント

- ① 子どもたちの日々の活動からその指導内容を取り上げる適切な時期を知ること
日々の生活や行動観察の中から学習に向けてのレディネスを発見する。
- ② 専門機関と連携していくこと
専門期間と連携し相談する。必要なトレーニングなどの活動を日々の学習の中に取り入れていけるようにしたい。
- ③ 日々の活動と関連付けていくこと
毎日の生活の中での様々な活動と関連づけた学習内容を取り上げることが効果的である。保護者の協力も仰ぎながら、より実践的な力を育てていきたい。
- ④ 児童が興味をもつ教材の工夫
児童の好きなこと、興味のあることを生かして教材を用意していくことは児童の意欲をかきたて、学習効果も上がる。常にアンテナをはって情報収集に努めたい。
- ⑤ 指導形態の工夫
1対1の指導や2対1の指導、少し大きな集団での指導などを内容によって組み合わせていくことも有効である。担任同士の連携を大切にしたい。

2 協議内容

「一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導内容、指導方法、指導体制、評価の工夫・改善」を協議の柱として設定し、5グループに分かれて活発な協議がおこなわれた。

- (1) 指導体制の工夫、教室の構造化とスケジュール管理の大切さを実感した。
目標別のグループ分けをして担任4人が連携・協力し合って指導に当たっていた。教室も構造化されていて、児童が活動しやすいように工夫されていた。また、児童のスケジュール管理がすばらしかった。
- (2) タイミングの良い課題設定
個々の実態を読み取り、タイミングよく課題を設けていたと思う。個別の目標と評価規準も適切だった。
- (3) 専門機関と連携する大切さを感じた。
「ことばのれんしゅう」を指導する際に、発声、構音などについて専門家に相談しているところが良かった。今後、専門機関との連携は大切にしていきたい。
- (4) 交流について
どの学校も交流についての悩みは尽きない。本人や保護者の願い、交流級担任との連携など、課題は多い。以下は植田先生の話。「この子にどんな力をどうつけるのか、将来像をイメージしながら交流させたい。交流級には、クラスの一員であることを認めてもらえるように交流している。兼ね合いを大事にしながら進めている。」

3 まとめ

- (1) 一人ひとりのニーズを分析、理解し、その子に合ったものをどう取り入れたらよいか、指導者が丁寧に見取り具現化した教育実践であった。いくつかの示唆のある実践で、参加者全員、大変勉強になったと思う。交流については、学校全体で取り組む特別支援教育を進めていきたい。支援級の担任が発信者となって風通しの良い学校にしていけると良い。また、専門機関とは、双方向の相談を心掛けたい。支援者同士が情報交換しながら子どもを輪のように取り囲んでいく支援体制を作っていきたい。分かりやすい授業を目指した授業のユニバーサル化が広まってきているが、一人ひとりにどのように支援していけば良いのか、学校スタンダードを取り入れていきたい。支援級だけでなく、通常級でも取り入れていける実践報告だった。
- (2) ・「国の動き 障害者基本法の改正」について
・「合理的配慮」およびその基礎となる環境整備について
・提案から学んだこと「毎日の生活の中での様々な活動と関連付けた学習内容を取り上げることが効果的」であること。課題を日々の生活にどう関連付け定着させていけばよいかという視点を、授業づくりに意図的に仕掛けることが大切だと学ぶことができた。
・柔軟な教育課程の編成に取り組んでほしい。学習で身につけた力を生活場面で、どのように発揮させるのかという見通しをもち、授業に反映させていくことが大切である。